

## 稲穂を摘みとる石庖丁 いしぼうちよう

米作りが始まった弥生時代には、大陸から伝来した新たな石器類が農耕に大きな役割を果たしました。今回紹介する出土品も、稲穂を摘みとるための道具として利用された石器の一つです。

この出土品は、横長の半月形の一辺に刃部を作り出し、ほぼ中央に2つの穴をあけた磨製石器です。唐古・鍵遺跡では、このような石庖丁の素材に、前期は檀原市・耳成山の流紋岩が、中期には和歌山県・紀ノ川流域の結晶片岩が利用されています。ちなみに今回の石庖丁は、濃緑色を呈す結晶片岩製で、全面に砥石で研いだ擦痕が残っています。

また、石庖丁にあげられた2つの穴は、紐を通し、手で握った時に指をかけ稲穂を摘みとるためのものと考えられています。現在、稲の収穫は根元から刈り取る「根刈り」が一般的ですが、これは弥生時代後期以降、徐々に普及した方法で、稲作が始まった弥生時代には稲穂部分を摘みとる「穂摘み」が主流でした。こ

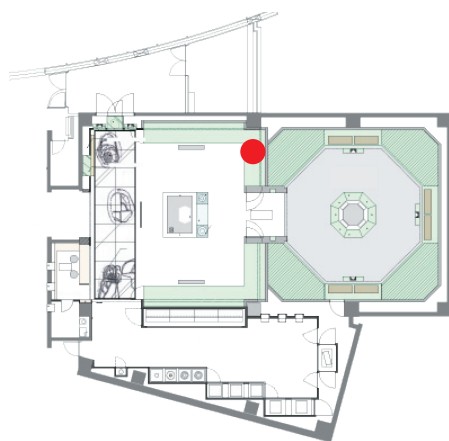
れは、稲の成熟が一定でなかったため、実った稲穂から順番に摘みとるのに適した方法だったのです。「根刈り」は稲の品種改良が進み、稲穂の成熟が安定したことから可能になったのでしよう。

さて、石庖丁は朝鮮半島から中国大陸と東アジアに広く出土し、中国では畑作地帯の華北を中心に、キビやヒエといった雑穀の収穫具として利用されました。今から約5000年前の華北でも稲が栽培され、この時には雑穀用の石庖丁が稲の収穫にも使われました。これが稲作の伝播に伴って、朝鮮半島から日本へ伝わったとする説が近年では有力です。しかし、石庖丁の形や刃の付け方は地域によってさまざまで、各地域における稲作の伝わり方は一様でなかったと考えられます。

日本各地でも石庖丁の形や石材の違いが認められ、当時の稲作の様子や石庖丁の製作技術と流通を考えるうえで重要な遺物になっています。

### ●コレクション・データ

時代 弥生時代中期  
調査 唐古・鍵遺跡第59次調査  
発見年 1996年  
大きさ 写真下：長さ13.7cm、厚さ0.6cm  
展示位置 第1室 「弥生の食」



ミュージアム上面図と展示位置